

[総説]

ソーシャルワーク実践における“音”の活用

—支援ツールとしての“音”の活用をめぐる—

戸塚 法子^{※1}久居 麻紀子^{※2}

はじめに (戸塚)

S. パワーズ (S. Bowers) は、今から70年ほど前、ソーシャル・ケースワークを「人間関係についての科学的知識および対人関係における技能を活用する技術 (art) である」と定義した。ケースワークを方法と過程の双方を含み、しかもそれ以上の何ものであるとし、「創造的なもの」と指摘した (S. Bowers 1949／松本 1968：32)。ソーシャル・ケースワークに関するパワーズのこの見解が公にされ約半世紀以上が過ぎた今日、筆者はこの「アート (art)」という言葉以上に対人援助の神髄 (originality) を言い当てる表現は他にはない考える。

英語表現での「アート (art)」の源流は、ラテン語「アルス (ars)」に対応し「芸術」と訳されるのが一般的である。Wikipediaによれば「芸術」は「表現者 (表現物) と鑑賞者が相互に作用し合い、精神的ないしは感覚的な変容を得ようとする活動」と記されている。「相互作用し合う体験」は、そのままソーシャルワーク実践とも重なる。まさに相互作用し合う体験を通して“いろいろな思いや内的体験”が「アート (art)」へと結実していくと考えられるのではないだろうか。

ソーシャルワークは時代を超えさまざまな人や領域からの刺激を取り入れ発展してきた。「アート (art)」がその人自身を見出し表現することならば、その人の人生で出会った感動体験、内的体験は、当人が次なる新たなものを生み出す原動力になっていくものでなければならない。その人のその時どきの感覚が誰かとの相互作用を経てさまざまに表現されていくならば、当人が周りの環境をどう捉えてきたのか、これまでの人生をいかに過ごしてきたのかは、人生の折々の過程で表出されていくはずである。そう考えると「アート (art)」は言語、非言語を含む幅広いコミュニケーション全体を含み込んでいるのかも知れない。

従来ソーシャルワークは、非言語的コミュニケーションも重要なアセスメント対象としてきた。

※1 淑徳大学総合福祉学部教授

※2 淑徳大学大学院社会福祉学専攻博士前期課程2年

しかし非言語に態度、しぐさは含まれても、音や音環境に関心が向けられることはほとんどなかった。昨今、音は自然音に加えさまざまなITデバイスをも媒体としながら、我々の言葉にしづらい複雑な感情を映し出す重要なツールであることはもはや疑う余地はない。筆者らは、ソーシャルワークにおけるアセスメントの対象として、生活環境のなかでクライアントが何らかの意味を付与している音を、言葉、態度・しぐさに次ぐ“第三の言語”と捉えることで、ソーシャルワーク実践が音環境へのアプローチを本格的に始動させていく端緒とし、本稿を音環境に関連する全体を見渡す総説と位置づけたい。そのうえで、

- (1) “音環境”研究のなかでも、大前提となる基礎的内容を網羅する代表的文献を取り上げることを通じ、ソーシャルワーク実践においてアセスメント対象として音をとらえるうえで参考となることがらには何があるか。
 - (2) “音”が福祉実践現場で対人支援に携わる人々によって、どのような問題意識を抱かれ、またどのように“音”の効果性が意識されているのか（今回、本稿では保育実践に焦点化）。
 - (3) (1)(2)をふまえつつ、“音”という第三言語をソーシャルワーク実践にいかに関係づけることが可能なのか。
- のそれぞれについて考察していく。

I “音”研究において前提となること（戸塚）

1. 意味論的環境観から生活のなかのさまざまな音を捉え直すということ

（『音のデザインー感性に訴える音をつくるー』；岩宮眞一郎，九州大学出版会，2007）

岩宮氏は、感性に訴える音のチカラを活かすうえで音（音環境）をデザインする大切さを主張。氏は、音環境がもつ意味、可能性、将来性に言及する。そして音（聴覚情報）が我々の感性にアピールするチカラは視覚情報に劣るものではないと指摘（岩宮 2007：1）。このことに加えソーシャルワーク・アセスメントの観点からは、サイン音についての氏の言及は興味深い。サイン音は何らかのメッセージを送り届ける音であり、通常 警報や呼び出し音、家電製品の終了音等が知られるが、これをある特定の人だけが感じ取るサイン音と考え、本人の周囲にある音を捉え直すならば、今まで思いもかけなかった「別の意味」が物語のなかに浮上してくるかも知れない。

岩宮氏は音を巡る現象、相互作用として、1つの感覚が別の感覚の感度（感受性）を変化させる共鳴現象と呼ばれる相互作用、ある刺激が複数の感覚を生じさせる共感覚という現象（特殊な能力がある人）、色聴（音を聴くと色が見える）、および音視（色や形を見ると音が聞こえる）についても言及している。音と映像の結びつきがもたらす効果、相互作用についても触れ、登場人物の気持ちの表現や場面のムードを伝えたり特定の演出効果を狙う場合など、映像作品に見られる効果音や音楽について言及している（岩宮 2007：33-71）。

そして大局的見地から貴重な示唆を提供してくれるのが、音のデザイン分野としても確立されている“サウンドスケープ (soundscape) デザイン”である。これは空間と調和する音、環境と共生する音をデザインするものと捉えられている (↔ランドスケープ (landscape) デザイン)。岩宮氏は、音を通じて人と環境の関係性をつくる大切さに着目しつつ、サウンドスケープ思想は、自然界の音から都市のざわめき、人工音、記憶やイメージ音まで、我々の周囲にあるあらゆる音を一つの風景と捉えていく (岩宮 2007 : 73)。物理的存在としての音だけでなく、文化として音環境を捉え、さまざまな社会で生活する我々が、音をどのように聞き取り、どう意味づけるのかを対象範囲にしている (岩宮 2007 : 111-123)。音を視覚も含めた音環境全体のなかでトータルな意味合いで把握すること、音に特定の感覚や感情を意味づけ、価値づけていくことについて触れている (岩宮 2007 : 112)。こうした背景には機械論的環境観 (そこに住む主体と無関係に存在する周囲の物理的環境) から意味論的環境観 (主体によって意味づけられ、構成された世界としての環境) への流れの変化があると考えられる。

さらに氏が着目するのがM. シューファーがサウンドスケープ研究に際し前提とした音響生態学 (Acoustic Ecology) の領域である (岩宮 2007 : 117)。それまでの音環境研究は物理学の一分野として発達してきたため一般には馴染みのない指標で捉えた自然科学的アプローチが主流であったと指摘する (岩宮 2007 : 117-118)。しかし全体が見えなくなってきたことへの反省から総合的学問分野としての自然学に関心が集まり、音響生態学は、これまで見過されてきた人との関わり、コンテクストとの関わりを積極的に研究対象として捉えていくと指摘している (岩宮 2007 : 118)。主体によって意味づけられた文化的状況として音環境を捉える重要性は、そのままソーシャルワーク実践が音環境を取り込む重要性に匹敵するであろう。

2. 日本の土壌から育まれてきた音への指向性と音活用の効果性

(『日本人のための音楽療法』: 牧野英一郎, 幻冬舎, 2019)

日本人と音の関係性に焦点をあてているのが本書である。源氏物語時代 (「若菜下」) に既に登場している音を伴う情景である「もののね」(「もののね」には、聴覚以外の感覚も含まれると牧野氏は指摘) に着目しつつ、音そのものを愛好する日本人特有の嗜好と、楽器音のみならず自然音を含む“音”のもたらす景色 (感情の景色と言うべきもの) について、さまざまな角度から言及している (牧野 2019 : 50-73)。とりわけ日本人特有の自然音に対する文化的伝統 (西洋音楽ではあまり取り上げられない自然音を多様に捉える豊かな文化性) を我々はどのように育んできたのかについても言及する (牧野 2019 : 52-62)。

本書タイトルにある音楽療法に関しては、氏は音の思い出を語るだけでも療法の効果は得られるとし、語る人を心地よい気持ちにさせ、脳活性化の効果も期待できると指摘。家族間で行う場合には、世代間のぎくしゃくした状況が解消されることにも言及している (牧野 2019 : 66-73)。

3. 心理学的側面から捉える音をもつ効果性

（『心を動かす音の心理学』：齋藤 寛，Yamaha 2018）

齋藤氏はストレスという角度から、今のストレスが昔のそれと大きく異なるのは、一つのストレスが次々に連鎖していくことであるとし、一番問題なのはストレスが長期にわたることであると指摘する（齋藤 2018：50-51）。ストレスは脳の情報処理に支障をきたし気持ちを不安定にしたり、感情のコントロールを失わせたりするとしうえで、実験によって音楽がストレスを軽減する力が証明されてきていること、また感情を前向きにさせる力、認知機能を向上させたり、マイナスからゼロへ、ゼロからプラス、そしてプラスからさらなるプラスへと感情をコントロールし行動へと発展させる力があることに言及している（齋藤 2018：53-99）。加えて好きな音楽を聴くことで生まれるさまざまな効果や幸せになるために正しい判断ができるようになる等々の効果についても多岐にわたって触れている。

4. 芸術療法である音楽療法が示す音楽の効力とその活用

（『芸術療法』：飯森眞喜雄編，日本評論社 2019）

言語を介した面接では得られない言語化以前の思いやりや、言語化が困難な感情的要素をイメージ表現で代行をしたり、補足可能な手段をつかって表現することの関心が、芸術療法として括られるジャンルに向けられてきていることが明らかにされている（飯森 2019：3-4）。そして芸術療法は、日常の言語活動を超え、象徴性をもつ芸術的イメージ手段（絵画、音楽、俳句・連句、ダンス・ムーブメント等）を用い、直接的ありのままにその時々の自己の状態を表現することを可能にするものであると指摘（飯森 2019：15）。総称としての芸術療法の共通認識・前提のもと、各療法が展開しているとしている（飯森 2019：3）。

阪上氏は、音楽療法は芸術療法のなかでもとりわけ関心の高いジャンルであり、幅広い領域において普及・実践が図られていることを指摘する（飯森 2019：123）。また心理学とは密接不可分の関係にあり、芸術療法全般がそうであるように、既存の心理療法の各学派の視点に添って音楽活動が活かされていることにも言及している（飯森 2019：128）。

本書では主要な国々の音楽療法の発展が整理されている。社会に広く認知され、医療的实践でも効果と意義が認められ、近年とくに大きな発展を遂げていることにも触れている。さらに国内外での音楽療法の定義に見られる変遷が整理されており、(1)生理的、心理的、社会的により良い状態（well-being）、生活の質向上にむけて音楽を意図的、計画的に活用する治療技法であること、(2)人間が生来的にもつ、音楽を楽しみ、音楽に反応する能力は、障害や怪我、病気があっても失われるものでなく、音楽的な訓練や学習の程度によって左右されるものでもないこと、(3)言語的コミュニケーションを介し自己実現がうまくできない人にとって、音楽は安全で保護された環境を意味し、孤立から生まれた感情を充分に発散するものであること、(4)安心、平静、緊張緩和、対話、交流の雰囲気や建設的感情、独創力と知性を呼び起こし目覚めさせること、また精神生活、

人間関係（社会的活動分野）等に応じ人格を再編すること，等が挙げられている（飯森 2019：12－15）。

徳田氏は，精神療法，心理療法で見られる“かかわり”は，治療者とクライアントが他の媒体を交えず主に言語に依ってきたと指摘。現在では，言語以外のイメージ表現・行動・感覚・感情表現を媒体として利用する芸術療法が関心と呼んでおり芸術療法のもつ多様性はいっそうの発展をもたらすとしている（飯森 2019：14－15）。

5. さまざまな臨床体験に基づいて見えてくる音の効能

（『音楽に癒され，音楽で癒す―音楽療法と精神医学／音楽創造』：馬場 存，中外医学社 2018）

精神科医である馬場氏は，自身の臨床体験に基づきつつ，音楽は言葉にできないさまざまな感情を呼び起こしたり，想い出を蘇らせたりしてくれるものであると指摘。音楽は楽しいだけでなく心の奥底にあるもの，人間にとって真実を描き出すものであると指摘（馬場 2018：1－4）。氏曰く，言葉にできないものが音楽として残っており，言葉も音楽も人間のコミュニケーションには必要であるとする（馬場 2018：12－13）。さらに氏は，日々受け取る情報は言語的情報がほとんどであるかのように感じられるかも知れないが，意識されていないだけで，抑揚やリズム，音的な意味を含めると音楽的情報はとても多い。また言語と非言語のコミュニケーションバランスがとれてはじめて人に健康な心が維持されるのではないかということ。病気や障害で音楽から離れざるをえなくなってしまった人であっても，病状に添った提供の仕方でも音楽を届けることができると指摘する（馬場 2018：12－13）。一定の精神状態に自分を戻してくれる音楽の効果的側面が本書を通してさまざまに出てくる。言語的コミュニケーションで表出されずにきた，通常意識にあがらないような感情，思考が表出されていく過程が事例を通じ具体的に表現されている。

6. 音響生態学から音環境とそこでの生物の営みを包括的に理解する重要性について

（『世界の調律』：R. マリー・シェーファー，鳥越，小川，庄野，田中，若尾訳 1986）

サウンドスケープの提唱者，M. シェーファーの代表的著作。本書の範囲はタイトルからも明らかなように多岐にわたる。あえてソーシャルワーク実践との接合を考慮した場合，以下が参考となる。氏はサウンドスケープデザインの前段階として，サウンドスケープを全体的に捉える重要性を説く。また現代社会に音が増大した結果，noise（騒音）の意味も変化してきたことに言及。noiseの意味，ニュアンスにも触れ，これを主観的用語と捉えると，ある人にとっての音楽は別の人には騒音になりかねない場合もあると指摘する（R. Murray Schafer 1977／鳥越他 1986：261－265）。音環境を捉えていく際，先行研究としてシェーファーは，生命体とその環境との関係を研究する生態学的見地から，音環境を総合的に理解する重要性を説く。音環境がそこで生きる生物に及ぼす影響は生活の場を注意深く調べてはじめて見えるとし，音響生態学について言及する（R. Murray Schafer 1977／鳥越他 1986：291－292）。そのうえでシェーファーは，我々は聴衆であ

ると同時に演奏者、作曲家であること。どの音を残し広めたいかを明確にするなかで、さまざまな音を区別し、排除しなければならない理由も見えてくると指摘する。また環境の再オーケストレーションについても言及し、それはあらゆる人に課せられた仕事であり、それによって聴き手に特定の反応を引き起こす効果を工夫し、変化に富んだ経験をもたらすことができると指摘する (R. Murray Schafer 1977／鳥越他 1986：292)。そのため、音響学、心理学、社会学、音楽、その他必要な多くの分野の教育を受ける必要性に触れている (R. Murray Schafer 1977／鳥越他 1986：293)。

シェーファーは、環境には多くのリズムが存在し、耳に届くような拍動は打たないかも知れないがそれらは重要な意味を有していること。自然音における休息と活動の全期間、その生から死に至る上昇と下降の一連の周期の観察から見えてくる営みに対する着目に言及している (R. Murray Schafer 1977／鳥越他 1986：294－295, 325)。

7. 音色が放つさまざまな特性をとらえること

(『音色の感性学』：岩宮眞一郎，コロナ社 2010)

これまで音がもつ多様な側面をそこまで捉えて来なかったことから、ソーシャルワーク・アセスメントにおいてはさまざまな知見を得ることのできる一冊である。音色について、氏は、日本工業規格音響用語の規格に準拠しながら、音色とは「聴覚に関する音の属性の一つで、物理的に異なる二つの音が、たとえ同じ音の大きさ高さであっても異なった感じに聞こえるとき、その相違に対応する属性」と、その定義を紹介 (岩宮 2010：1)。音色は、聴覚的印象として音が有する三つの側面、すなわち音の大きさ、高さ、音色のうちの一つであると指摘。岩宮氏は、音色の性質は、大きさや高さ比べ、一次元的には表現ができないとする (岩宮 2010：4)。そもそも音色の心理的性質は、明るさ、きれいさ、豊かさといった多様な心理的な性質をおびているとする (岩宮 2010：4)。そして印象的側面から捉えた場合の美的因子 (澄んだ一濁った、きれいな一汚い)、金属性因子 (鋭い一鈍い、固い一柔らかい)、迫力因子 (迫力のある一もの足りない、弱弱しい一力強い) といった区別にも言及している (岩宮 2010：5)。氏曰く、言葉でコミュニケーションを取ったり、生活の中で聞こえる音を聞き分けられるのも、音色の識別的側面によってであると指摘。さらに音の識別は、聞こえてきた「音」と記憶の中にある「音」を照合する過程のなかで行われるとする (岩宮 2010：6)。我々は日常生活を通してさまざまな音を聞きそれらの音を記憶し、聞こえてきた音と記憶にある音とを照合させて何の音かを判断しているとする。すなわち一種のパターン認識と考えられるとし、音を特徴づける性質が一致していれば、記憶の中の音と同一の音であると判断できるとしている。そして人間は記憶のなかの音から音のイメージを再構成する力をもっていることにも触れている (岩宮 2010：6－7)。

また岩宮氏は、日本語には音の感性を伝える言葉としての擬音語が豊富に存在しており (のちに久居が触れている“オノマトペ”に関連)、重要な表現手段の一つとなっていることにも言及

する（岩宮 2010：8）。氏曰く、擬音語は音の感性的な側面を反映した存在であり、擬音語表現は音によって生じる聞き取り印象や音響的特徴を特定するのに有効な手がかりであると、さらに音に関する評価尺度、分析についても触れている（岩宮 2010：8, 22-35, 96-113）。

Ⅱ 福祉実践のなかで“音”はどのように意識されてきたのか。実践に“音”を活かすということについて（久居）

ここは子どもにとって居心地の良い場所か、そうではないかを配慮しながら、日々子どもの生活する保育環境を豊かにする工夫を行なっている。乳児は特に周りの環境や雰囲気を敏感に肌で感じ取る。保育所に自宅のようにくつろげる場所があったり、好きなおもちゃがあったり、季節の花が飾ってあったりと、安らげる保育環境を整えることが大切である。それ以外でも、衛生的で整理整頓がなされた環境である配慮も欠かせない。しかしこれまでの筆者の保育実践から思うことは、物理的環境だけでは保育環境の全てを満たすことはできないということである。筆者は人的環境が最も重要であることを保育実践を通して痛感してきた。大人がバタバタと動き回る動線が多くある空間ではなく、大人がその動きを調整することで、ゆったりとした雰囲気が生まれ、保育者の立ち居振る舞いや声の音量も子どもにとって落ち着いた状況を整えることができる。今回は人的環境に独特の意味を与える音環境に着目し、子どもや大人の変化／成長に影響を及ぼす音のさまざまな側面を考えてみたい。

筆者は立場上、年間を通じ保育環境をさまざまに観察する機会をもつ。進級・入園を機に新しい保育室や、関わる大人の交替により、慌ただしい1日を過ごすことが多くある。しかし3、4ヶ月するとその雰囲気が一変する。その間、保育者の子どもに対する表情、眼差しや声のトーンといった非言語的側面での大きな変化を見てとることができる。保育者は、自身の感情や声の出し方を調整しながら子どもと絶妙な距離感を創っていく。安定的な保育環境を創り出すために、日々の流れやホッとできる色合い、装飾品等、言語以外から取り込まれる刺激（視覚情報）の役割も大きいと考える。そして落ち着いた声やテンポが意図的に表出されていくことで、子どもの安心感が保たれていく。

1. 音環境から捉えた保育環境デザインについて

前述のように保育場面における保育者の声や動きが穏やかである場合、子どもにも同様の穏やかで落ち着いた空気感が漂う。筆者はこの連鎖に保育者が持ち合わせる価値観、素養が大きく関係していると考えている。筆者自身、保育者と子どもとの向き合い方について一定の理想を掲げつつ保育所づくりを進めていく事が多いが、保育所で預かる子どもの人数や保育者の配置人数、生活する物理的環境が整っていない状況や保育者相互の人間関係が整わないといった原因によって穏やかな空間を創り出す難しさを感じることもある。保育者一人ひとりが創り出すさまざまな

音相互の呼吸を整えつつ、子どもが安らげるコミュニティーを創り出す重要性を深く感じている。普段の対話に不可欠な挨拶、表情、声の出し方にも実はさまざまな音が含まれている。さまざまな音を効果的にデザインし、全体としての保育環境を整えることで、音が醸し出す意味あいを活かし、保育環境づくりに貢献していきたいと願っている。

2. 音がもつ特性を活かした日々の試み ―わらべうたの活用を通して―

筆者の保育園では、日頃よりわらべうたを取り入れた実践を行っている。わらべうたは地域の方言を反映し、言葉の動きさえ旋律に反映されていく。しかし言葉を活かしたうたであるとともに遊びの要素も伴っている。勝ち負けや偶然性といったゲームの楽しさもあることで、一人でも大勢でも楽しむことができる。リズムカルな言葉やとなえ言葉、オノマトペやわらべうたを、子ども目線で保育者がゆっくり歌ってあげると、子どもと保育者とが吸い込まれるように気持ちが通じ合う瞬間が生まれていく。

言葉が相手に情報を伝えるという明確な機能をもつ。一方で声によって表現される歌には、人の絆が深まる何らかの要因があるのではないかと筆者は考えている。音楽がもつ情動的なメッセージは、言葉がわからなくても直感的に伝わることから相手を特定しない。世界中に子守唄や遊び歌が存在し、音楽が子どもの育ちの中で多用されているのは、音楽のこうした性質によるところが大きいと感じている。

最近の保護者を見ていると、子どもに直接歌いかけることが少なくなっている。子どもの歌をあまり知らないのかもしれない。直接の歌いかけは、歌い方自体を自在に変化させられるとても優れたコミュニケーションツールである。その意味で音が出すさまざまなメッセージを活かしながら音環境全体を整えることは、子どもの感覚を無限に育んでいくために必須なことであると考えている。

一般に子どもの育ちはゆっくりと時間をかけて進んでいく。衝動性のある子、いわゆる「気になる子」と言われる子ども達は、家庭環境の影響を受け愛情が薄く不安を覚えている場合も少なくない。しかしこうした子どもたちも、同様に時間をかけゆっくりと育ちの歩みを進めているのである。そうした子どもへのアプローチにおいても前述した保育環境や保育者の関わり方が鍵になってくる。市川は(2018:p40)衝動性とは「考える前に体が動いてしまうこと」と記している。このような子どもへのアプローチは日々悩みながら関わることが多い。乳児であればわらべうたを通しアイコンタクトや肌で触れ合う遊びを行う事も多い。幼児であればグルーブ遊びを通してうたに触れ「あなたと楽しんでいるよ」といったメッセージを送ることで気になる子ども達からも安心感で満たされた表情を感じ取ることができる。こうしたことにおいても、保育者が語りかける声質、その音量や表情も音環境のデザインに大いに関連するのではないかと考えている。

子育てにおける感情表現と愛着について、吉永(吉永 2016:95)は「乳幼児への音声には、愛らしい対象への大人の感情がはっきり表れる」と指摘する。園でも保育者はわらべうたを歌う

際に表情をほころばせ、言葉の抑揚をつけることに気をつけている。また保育所保育指針には「環境を通して行う」という項目がある。ここでは子ども自らが興味や関心を持って環境に取り組み、試行錯誤しながら環境へのふさわしい関わり方を身につけていくことが企図されている。保育者の声もまた、子どもにとって重要な環境の一部である。

語りかけや歌いかけなど、音声をともなうコミュニケーションについて吉永は「音声のニュアンスから、感情や意図の繊細な違いを的確に読み取るといった調査結果が確認されている」とし「子どもは、感情表現を保育者の大人の語りかけから習得するだけではなく、表情豊かな声を聴くことから感情や意図を読み取りながら学んでいく」と指摘している（吉永 2016：213）。

言葉だけの表現では難しい部分を、声の音色がもつ奥深さや広がりも音環境の一部と捉え、生活のなかの音を実践に活かしていくことは、人の情動・感情を豊かに育てるうえで、今後福祉分野における最も重要な課題になるのではないだろうか。

Ⅲ “音” という第三言語をいかにソーシャルワーク実践に活かすことが可能なのか（戸塚）

前出のⅠ、Ⅱを通じて筆者はいろいろな情報から多くを学ぶことができた。ソーシャルワークでは昨今、痛ましい事件が断続的に続いており、アセスメントや介入においても、従来のソーシャルワーク・パラダイムだけで捉えることの限界性をたびたび感じてきた。そしてそのことが今回、“音” という新たな媒体を用いてソーシャルワーク実践を捉え直す直接的な引き金になった。今回の作業を通じて得られた点は以下の通りである。

1. 音環境を一つの文化として捉えることにより、クライアントの周囲で起こっているさまざまな音を伴う出来事を拾い直し、意味づけ直すことができるのではないかとということ（意味論的環境観、音響生態学への着目）。
2. 特定の人だけが感じ取れる音（サイン音）を解明することができれば、それまで解決が難しかった“隠れた意味性”を発見することができるのではないか。
3. 自然音に対する日本人特有の文化的伝統を理解し実践に取り込むことで、アセスメントや介入手法に“広がり”を上乗せでき、さらに日本語がもつ豊富な感性を反映する擬音語を意識的に実践に活かすことで、クライアントの世界観理解に貢献することができること。
4. 音楽のもつ効力（ストレスの軽減、感情の立て直し、気持ちの安定化等）をソーシャルワーク介入に応用することで、言語的コミュニケーションによる自己表現がうまくいかない人に対しても、さまざまな感情を呼び起こしたり、現状からの前向きな離脱をもたらす可能性を期待できること。
5. 抑揚やリズム、音的な意味を含む音楽の情報や、音がもつ大きさ、高さ、音色といった特徴をソーシャルワーク実践に意識的に取り込むことで、クライアントが自身の健康な心の獲

得をより安定したもののできる可能性が高いということ。

今後は、多様な福祉実践の現場でこれらのことを検証すべく、次の歩みを進めていきたい。

おわりに（戸塚）

まだソーシャルワーク実践にとってほとんど馴染みのない音や音環境の活用への挑戦に際し、まずはさまざまな文献を解題し、広く情報収集することに主眼をおいた。ソーシャルワークでの音研究は、まさに始まったばかりである。今後は音を巡る国内外の類似する研究動向に引き続き着目していくとともに、日々深刻な問題をつきつけられているソーシャルワークにとって、音が何らかの意味で問題解決の“突破口”“切り札”になることを期待しつつ、一方で音に関する実践事例を収集・分析しつつ歩みを進めていきたいと考えている。

【注・参考文献】

- 馬場 存 (2018) 『音楽に癒され、音楽で癒す—音楽療法と精神医学／音楽創造』中外医学社。
- Bright, Ruth (1996) Music in Geriatric Care. (=2000, 小田紀子, 小坂哲也訳『高齢者ケアにおける音楽』莊道社.)
- Bunt, Leslie (1994) Music Therapy. (=1996, 福田雅美訳『音楽療法』ミネルヴァ書房.)
- 藤森 守 (2000) 『響きの生態系』フィルムアート社。
- Hayakawa, S. I (1978) Language in Thought and Action. (=1985, 大久保忠利訳『思考と行動における言語』岩波書店.)
- 市川奈緒子 (2018) 『気になる子の本当の発達支援』風鳴舎。
- 飯森真喜雄編 (2019) 『芸術療法』日本評論社。
- 岩宮眞一郎 (2000) 『音の生態学—音と人間のかかわり—』コロナ社。
- 岩宮眞一郎 (2007) 『音のデザイナー—感性に訴える音をつくる—』九州大学出版会。
- 岩宮眞一郎 (2010) 『音色の感性学』コロナ社。
- 小西行郎, 志村洋子, 今川恭子, 坂井康子編著『乳幼児の音楽表現～赤ちゃんから始まる音環境の創造～』日本赤ちゃん学会。
- Krause, Bernie (2012) The Great Animal Orchestra. (=2013, 伊達 淳訳『野生のオーケストラが聴こえる』みすず書房.)
- 牧野英一郎 (2019) 『日本人のための音楽療法』幻冬舎。
- 無藤 隆監修, 吉永早苗 (2016) 『子どもの音感受の世界～心の耳を音感受教育による保育内容「表現」の探究～』萌文書林。
- 齋藤 寛 (2018) 『心を動かす音の心理学』Yamaha。
- 佐藤正之 (2017) 『音楽療法はどれだけ有効か—科学的根拠を検証する』化学同人。
- Schafer, R. M. (1977) The Tuning of the World. (=1986, 鳥越, 小川, 庄野, 田中, 若尾訳『世界の調律』平凡社.)
- 重野 純 (2014) 『音の世界の心理学』ナカニシヤ出版。
- Vergas, M. F. (1987) Louder Than Words -An Introduction to Nonverbal Communication. (=1987, 石丸 正訳『非言語的コミュニケーション』新潮社.)
- 吉本和子 (2006) 『乳児保育～一人ひとりが大切に育てられるために』エイデル研究所。